

### ■福岡市彫刻のあるまちづくり事業

福岡市では、ゆとりといるおいのあるまちづくりを目指して、道路や公園・広場などの公共空間に彫刻作品を設置する「福岡市彫刻のあるまちづくり事業」を行ってきた。作品は、83年に設置した水上公園の「風のプリズム」から、最新の天神西交差点「平和の門」まで、23点を数える。98年2月に行った市民アンケート調査では、70%の市民が屋外彫刻に関心を持ち、「感じの良いまちなみづくりに効果的」「芸術作品を身近に親しむことができる」など、良いイメージを受けとめられていることがわかった。

### ■パブリック・アートへの展開

最近、パブリック・アートという言葉がこのような屋外の彫刻に対して使われるようになってきた。80年代の後半にアメリカで誕生したこの言葉は、公共空間に置かれる市民のための彫刻が、その土地の歴史、文化、人々の暮らしなどをテーマとし、空間を豊かにし、人々の心を広げ、生活に喜びをもたらすものでなければならぬことを意味している。

アンケートでは「意味のわかりにくい彫刻が多い」「なぜその場所にあるのかわからない」という意見もある。また少数ではあるが「彫刻などいらない」という意見もあった。確かに、彫刻のあるまちづくりで置かれてきた作品の中には、目につかなくかつたり、わかりにくかつたりと人気のない作品も含まれている。そこで、数年前から都市景観室では、設置する彫刻の役割、テーマなどを地域の人の意見も取り入れながら検討し、数人の作家にそのテーマに沿った作品の案を提案してもらい、その中から最もふさわしいものを選んで制作を依頼する新しい方法を採用している。

パブリック・アートの視点をもつて、少しでも多くの人に共感を持っていただける事業にしたい。この様な試行錯誤の一つの成果が、左のページに掲載している作品群となった。

### まちなかのアート

# アートによる豊かな都市づくり

### ■課題と展望

今の都市には、人の心を豊かにする都市空間づくり、地域への愛着やコミュニティ意識を高め、豊かな感性を育む取り組みなどが求められている。

その好例として、福岡では都市そのものを会場とした現代美術展「ミュージアム・シティ・福岡」や、12ページに掲載した「ピピバ」はかた、26ページに掲載した「風の見える美術館」など、市民によるアートを活用した手作りのイベントが、まだまだ小さな動きではあるが盛んになってきている。また、3月に開館する福岡アジア美術館では、美術館内にとどまらず、まちを舞台とした美術交流事業が行われる。

福岡市ではこれまでの彫刻のあるまちづくりの実績や、アートが生活の中に少しずつ届けようとするこのような社会の状況を読み取って、新たな事業の方向性を検討している。目標は、まちが心豊かな人々を培い、人々が豊かなまちを育む「アートによる豊かな都市づくり」。アートを媒介として、喜びが生まれ、人の輪が広がるようなまちづくり、人づくり、活力づくりに取り組むみたいと考えている。

【注】福岡市彫刻のあるまちづくり事業に関する市外美術館展覧会「福岡市彫刻のあるまちづくり」を開催。福岡市街から制作を抽出した1,000人投票による「市民の彫刻」の発表による。

本誌の掲載作品：0107「福岡市街」・アート

①	②	③
④	⑤	
	⑥	⑦

①明治通りに置かれた、彫刻のあるまちづくり事業初期の作品「風のプリズム」②同じく「どっこいしょ」③四事基築1号作品、水上公園の「風のプリズム」④博多の駅前広場「PIM・PAM・POOM」。サッカーをイメージしたカラフルな作品⑤1万人を超える市民の募金活動で設置された、博多駅前広場「着衣の懐たる母と子」⑥健康づくりセンター前の元気な作品「キース・ベリンク彫刻」⑦西日本新聞会館前「アリーズ・リクエスト」⑧西宮駅前広場「ソフィア」。台座のない作品は人気が隆い。

